
人類改造計画 スタート＆スタート ニつの救世主

ライツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類改造計画 スタート&スタート 一いつの救世主

【Zコード】

Z7306F

【作者名】

ライツ

【あらすじ】

「絶対に、警視庁に入つて、父さんを奪つた犯人を捕まえてやる！」幼い時、心に誓つたあの約束。若干、十五歳の少年が繰り広げるファンタジー＆ミステリー。序に渦巻く陰謀。暖かな仲間。頼れる恩師。世纪の少年名探偵 警視庁に入庁した序に、悪夢が襲う。「勝つか負けるか」「裏切るか先を行くか」天才少年たちの頭脳戦がはじまった。

第一章 運命（前書き）

ジャンル上では、推理となつておりますが、若干ファンタジーも入つております。

初めて書いた作品なので、感想、アドバイス等、をお書きいただけると、何よりも光栄です。

第一章 運命

第一章 運命

「身元も名前も、年齢も性別もわからない犯人を捜すなんて無理だよ・・・・・」序は、茜空を仰ぎながらグチをもらした。「金もないからココアも買えないし」

序は十四歳の誕生日に買つてもらった腕時計を見た。四時十二分
昼休みはとっくにすぎている。犯人もわからないし、違う事件
に回りたい・・・・・序は思った。

「 プルルル。静かな夕方に着信音がこだまする。序には相手がわかつっていた。あのガンコ課長様だ。

「もしもし」序は舌打ちし、携帯を取り出した。

「何やつてる！ 休憩はとっくにすぎるぞ！ そんなチンタラしてて、犯人はわかったんだろうな！」

あくまでもこれは携帯だぞ。序は思った。トランシーバーじゃないんだ。何だあの馬鹿でかい声は。ゴジラのゲップよりもでかそうだ。

序は「今行きます」と残し、切つた。「行くか」序はため息をつき、警視庁へ向かった。

ここで卯城序について語らせてもらおう。

序は十五歳の中学三年生。あと数ヶ月で受験だ・・・・・だが、序にはその必要は、全くと言つていいくほどない。なぜなら、序は警視庁捜査一課の、仮刑事に就任しているからだ。正義感が強く、判断力があり、思い切つた行動が、周囲から一目置かれている。学校にはほとんど行かず、庁の近くで一人、マンションに生活している。そして一年前から、この事件を担当することになった。

序が警視庁に入庁できたのにも、ある理由があつた。課長と父親が、旧知の仲であるからだったからだ。しかし、それは過去の話で

あり、今は、卯城駿一郎はこの世にはいない　あの忌まわしい、
麻薬中毒犯を捕らえようとした時に、狂っている犯人により、（こ
れは後にわかつたことであるが、その中毒犯は、殺人自体を快楽と
していたらしい）殺害されたのだ。当時、幼かつた序にとつて、憧
れであり最愛の父親が殺されたのは、致命傷であつた。父の仇
復讐のため、幼い序は心に誓つた。「絶対に、警視庁に入つて、父
さんを奪つた犯人を捕まえてやる」その気持ちは今でも変わらない。
序は受付をすませ、捜査本部室へ向かうエレベーターに乗り込んだ。

本部室へ向かう廊下には、奇妙なポスターが貼り出されていた。
これは、ひょつとして　。

脅威の連續殺人犯に注意！

先月、八月二十八日に都内で連續殺人が相次いで発生。犯人の身元
は不明。心当たりがある方は、警視庁まで。

「石島さん！」序はクーラーがんがんの本部室のドアを閉めずに、
課長のデスクに詰め寄つた。「この事件つて今、俺が担当している
事件ですか？」

周りからクスクスと笑い声が聞こえる。課長はコーヒーをすすり、
横目で序をにらんだ。「お前はこの一ヶ月間何をしてきたんだ？」
序は顔が真っ赤になるのを感じた。

「それともう一つ」序が周囲の視線を避け、自分のデスクにつこう
とした時、石島が呼びかけた。「石島と呼べといつただろう」「
はい。すいません」

序はマックを立ち上げ、犯罪者リストをまとめるふりをして、そ
の場を逃れようとした。みながこのことを忘れるまで。

しばらくして、序は立ち上がった。ふと、課長のデスクのパソコンと書類に目をやつた。「結局犯人は見つからないんですね」「ああ」課長は言った。「それどころか、手がかりの一つも……」

・・・

「うわさでは、何やら手を直接加えずに、人を殺していると 」

となりで頭の切れる同じ捜査課の、課長代理、徳井が言った。

手を加えずに 序は心の中で思つた。

「これは海外でも起きているんですか？」

「主にアメリカ、アジア、ヨーロッパ。たまに、アフリカぐらいね。へんぴなところでは、あまり被害はないらしいわ。ほぼ世界のすべての区域で、規則性がない状態でね」女性捜査員の白木が言った。
この十五歳の少年の会話に関わるのは石島と、白木と松井（骨折で入院）、徳井ぐらいしかいない。（最も、今挙げた者たちが殺人事件の正式捜査員だが）。その他は、こんなガキに関わるくらいなら、仕事を進めたほうがよいと思つていい。

序との会話のあと沈黙の作業が続いた。序は三人のチェックが終わるたびに、至福のココアを味わつた。そのせいで、仕事はまったく進まなかつた。まだ被害者はごまんといる。

「よし」課長は咳払いをした。「今日もご苦労。インターネット班と海外情報班以外は解散。それから、これから最低一時間は連續殺人に関する情報を調べるように。以上、解散」

「おつかれさまでした」大半の人々がドタドタと去つてゆく。
序も帰りの支度をした。「おつかれさまでした」

「序、待て」課長はさすように言つた。「お前は残れ」

腕時計の針は八時を回つていた。夜もすっかり深くなつていた。
この時間帯の居酒屋通りは、酒くさいオヤジであふれている。どこからともなく、「おーい、もう一軒行くぞ」と聞こえてくる。しゃつくりをしながら。

「しかし、中学生がこんなことしていいんすかねえ？」序は石島のおちょこに日本酒を注いだ。

「を前はふいつも『お前はいつも』、ふおういう時に正論ふお言づからふああ『こういう時に正論を言つからなあ』」完全に酔つて

いる。さつきから、しゃつくりを八回もしている。「まわ《まあ》、飲へ（飲め）飲め」

序は手元のロックに見せかけたウーロン茶を飲んだ。串カツをほおばりながら。「おっさん、串カツあと四本」

「あいよ」店主が気合の入った声を上げた。

「それより」課長が酔いからさめた。これが石島のすゞいところである。「その話なんだが」

「はい」序は食べようとしていた、串カツを皿に置いた。

「事件の事だが、新たな情報が入った」課長はテーブルにドンと一枚の手紙を置いた。「これを読んでみろ」

しかしながら、日本捜査員の方々には失望したよ。FBIはもう、私を、ほぼ特定しているらしいし。申し遅れたが私が、かの、連續殺人事件の犯人だ。 といつても、信じてもらえないようだけどな。ヒントをあげよう。私は捕まらない。ある秘密のおまじないをかけたからな。例えば 魔法アイスランドとか？

そして、最後にもう一つだけ。氷国で、金塊十キロの取引をしよう。さもなくば、お前たち捜査員の誰かの、大切なものを奪う。日時は、取引者が直接このT E S T に、連絡をくれ。うそをついたところで無駄だ。私にはすべてお見通しだ。

序は息をのんだ。「こんなことが 「脅迫状……ですね。ハハ。でもなんか、無性に腹が立つ」

「ああ。本当にこんな物の存在があるとは思えんが、今までの殺人の方法を考えると」

「誰がやるんですか」

序の頬に戦慄が走る。まさか自分ではないだろう。「取引をするのは」 課長は口くちもつた。「お前だ、序」「む、無理です」と言いたかった。でももう遅かった。口が勝手に動いてしまった。もう止められなかつた。「やります」と言つてしまつた。もう止められなかつた。

また。使命を感じたわけでもない。課長は退いたが、序は腹を決めた。「やります。俺は刑事です」序は敬礼をした。これが序の誓いのしるしだ。

課長は口を真一文字に結んだ。「わかった。しかし、その場には

私もいく。白木も松井も、徳井も連れて行く

「ありがとうございます」「序は精一杯の声で答えた。

序は胸がいっぱいだった。だが序にもプライドがあった。刑事として、卯城駿一郎のせがれとして。

第一章 魔術師マーリンの書

第一章 魔術師『マーリン』の書

序のマンションは普通ではなかつた。といつても、マンション自体に異常はない。おかしいのは、序の部屋だ。

305号室には、地下室が存在する。序が三ヶ月前に、物音もまったく立てず、費用もかけずにできた地下室だ。ちよつと、あの伝説と称されたなぞの古文書を偶然、都立博物館の遺跡庭園で発見したときだ。

序は三重ロックをかけた金庫のパスワードを薄暗い室内の中、入力した。だが、まだ終わりではない。序は地下室の電気をつけた。約五秒後、ようやく蛍光灯に光がともつた。

序は指紋認証システム（コビキタス）に軽く、人差し指を触れた。

ピー。ガチャン。

ロック解除だ。序はゴム手袋をはめなおした。そして、慎重に古代の文献らしきものを手に取つた。

ああ、これだ。この古文書を手に入れてから、もう三ヶ月も経つが、これを見るたびに笑いが止まらない。まるで、今までほしかつたおもちゃをやつと買つてもらつた子供のよつ。

思い通り。

この書物には、まさしくその言葉がぴつたりだ。序は、古汚い作業用テーブルの上のものをどかした。今必要なのは、これだけだ。

次に、この地下室の仕組みについて、説明させていただこう。

305号室の地下に存在するこの部屋は、防音性、耐久性、安全性、どれもが完璧に備わっている。ここに入るには、305号室のバスルームの隠し扉を見つけ、六つの鍵を使わなくてはならない。隠し作業をするにはもってこいだ。また、中から部屋の状況、マンションの半径五百メートル以内を一括して見ることが出来る。もちろん、電気も通っている。

ではなぜ、こんなにも素晴らしい地下室を、物音も立てず、費用もかけず、作り上げることが出来たのか。といつて謎問を読者の皆さんもつづだらう。第一、三階に地下室など

答えは簡単である。序が手にしてあるこの謎の古文書こそが、答えだ。

マーリンの書。中世に製造された。今まで数多くの、世界に名を連ねる考古学者が研究してきたが、発見もあらか、その内容も把握できなかつた。その伝説の古文書を十五歳の少年、卯城序が発見し、わずか一週間でその書物の八割の内容を解読したのだ。

十割に満たなかつた理由　それは、458ページある内の、256ページと、257ページの二ページが何者かによつて破られていたのである。ビリビリに破られていた。自然ではありえないほど器用に。

マーリンの書。それは、日本語に直訳すると、「九つの魔術」である。もちろん内容は、何かのファンタジーにでできそうな、モンスター。なにか、お宝が眠つていそうな地図。数々の有名科学者たちが残した文献。何よりも詳しい歴史書。どんな難病も治せる薬草学。そして、魔法。

このマーリンの書を残したのは、あの偉大なる魔術師、マーリンである。各地を旅し、今に伝わる数々の発見を残してくれた偉大な人物だ。

マーリンの紹介はここまでとさせていただこう。

序の推測が正しければ、破られたページは、九つの術で最も高度とされる「死靈術」である。

九つの術というのは、習得が簡単なものから、術を使えるようになるまで、一生かけても終わらない（そのために、身体能力を極限までに高める魔法を使う）術まで様々である。

元素魔術、催眠術、強化術、遮蔽術、治療術、神通力、鍊金術、時空術、死靈術。この、九の術を、使えた人物は地球上、存在しない。しかし、わずか十五歳の少年卯城序は、元素魔術、催眠術、強化術までは使えるレベルまで達している。

そんな万能の鬼才が記した書物を使えば、地下室を作るなど容易である。もちろん、魔法で。

簡単な物体を作り出す、動かす術というのは基本的であると、この書は語っている。だからこそ、九つの術の中にも入っていないのだ。

魔法を使つてはいけないという法律は、当然ながらない。もうこれは、俺のものだ。序は思わずにやけた。

地下室だけではない。序の頭では理想とする新世界が渦を巻いていた。

序は地下室を出た。マーリンの書を地上に持ち出すなど、危険すぎる。見つかっただけで死刑にされそうだ。

人間というものは、何でもほじがるもの。序も、その中の一人だ。

黄金　それが、序のお田道だ。金田道ではない。きらびやかな輝きがほしいのではない。

目的はただ一つ。この、九つの術のためだ。

金というのは、体内に眠るエネルギーを目覚めさせ、増強する働きがある。いわゆる覚醒だ。

魔法は、自然からエネルギーをもらひことがあるが、基本、自らの体力、知力、精神力。第六感からなるものが多い。そのため、一度魔法を使うと、普通の人間ならば、へ口へ口になってしまふ。

普通でないのは卯城序自身でもある。マーリンの書を読み、理解した上でも、魔法を使うというのは、並大抵にできることではない。ならば、なぜものの一週間で魔法を使えるようになったのか。

そう。卯城序は生まれながらにして、魔法児という、天才的な素質を持つていたのだ。ずばぬけた行動力。判断力。決断力。理解力。記憶力。当てはまる部分も少なくはない。

そんな天才的な実力を持つ序でさえも、やはり体力というものの本質を変えることは、非常に難しいことだ。そのためにも金が必要なのである。

序はリビングに戻り、飲みかけのココアでのどを潤した。

「アフリカ」序は沈黙の部屋で、一人、つぶやいた。

黄金はアフリカにあつた。黄金の生産地サイトをスクロールし、意外と簡単に手に入るものだと実感していた。魔法を使えばの話だが。採掘権を手に入れ、場所を確保し、実行に移せばいいだけのものだ。

世の中こんなものだ。人間は簡単なことを、難しく考えすぎる。答えはもうでているのに。

序は腰を上げた。そうと決まれば早いほうがいい。序は、旅行提供会社に電話をかけた。

思い通りだ。コールを数えながら思った

しかし、そんな序にも一つ気がかりなことがある。脅迫状の推測が正しければ、俺と同じ能力を持つ奴がもう一人いる。

俺

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7306f/>

人類改造計画　スタート＆スタート　二つの救世主

2010年10月9日05時56分発行